第五節　製造業・職人

一　製造業

（一）矢吹の製造業

製造業は、生活に必要なさまざまな商品を生産する生業であるが、その組織・形態により大別すると、古くからの職人による伝統的手法と技術の継承による熟練を要する手工業的生産と、明治にはいり本格的に台頭した工場的労働者（職工）による生産がある。

矢吹の製造業の状況については詳細を示す資料に乏しく詳細は語れないが、明治時代後期から大正初期の統計書から製造業の生産の種別や規模を紹介するにとどめる。

なお職人の生産については別項で扱うこととする。

（二）統計書にみる矢吹の製造業

表13の資料は『西白河郡統計書』より抜すいしたもので、かならずしも各小学校『郷土誌』と合致しない点もあるが、状況を知る手がかりとする。

織　物

織物は各戸で冬季の副業として、また高齢者の仕事として自家用の着物生地を織っている。従って機台（はただい）も各家で所持していた。木綿織物と絹織物があるが当地方では木綿織りが主流である。

【表13】製造業戸数調

業種	年度	矢吹町			中畑村			三神村		
		製造戸数	機台・石数	職工	製造戸数	機台・石数	職工	製造戸数	機台・石数	職工
織物（縞木綿）	明治四十二									
	明治四十三	一	一台	一	一	一	一	一	一	一
	大正　三									
醸造（清酒）	明治四十二	三	八〇二石					三	四七〇石	
	明治四十三	三	七九〇石					三	三九四石	
	大正　三	三	一〇八三石					三	一九二石	
醸造（焼酎）	明治四十二	三	二四石					三	一六石	
	明治四十三	三	二二石					三	一二石	
	大正　三	三	三九石					三	七石	
醸造（醤油）	明治四十二	二	七九石		一	一三石		三	一七九石	
	明治四十三	二	一二八石		一	二四石		三	一〇七石	
	大正　三	二	八三石		一	三八石		三	一七八石	
機械精麦粉	明治四十二									
	明治四十三									
	大正　三	一		八						
金属製造	明治四十二									
	明治四十三									
	大正　三	四		一〇						
油類	明治四十二				一	八石	一			
	明治四十三				一	九石	一			
	大正　三				一	三二石	一			

（西白河郡統計書）

業種	年度	矢吹町			中畑村			三神村		
		製造戸数	機台・石数	職工	製造戸数	機台・石数	職工	製造戸数	機台・石数	職工
製茶	明治四十二				七	二五石		二	六〇石	
	明治四十三				七	二五石		二	一五石	
	大正　三									
陶器	明治四十二							一		一
	明治四十三							一		一
	大正　三							一		一
菓子	明治四十二									
	明治四十三									
	大正　三	六			一			一		
竹製品	明治四十二									
	明治四十三									
	大正　三	二		五						

明治四十三年、矢吹・中畑・三神に各一戸縞木綿織物所が登録されているが、それぞれ機台は一で職工一とあるところから、通年生産して、自家用にとどまらず商品化したと思われる。しかしこの時期全国的に紡績工場・織布工場が稼動しているので、安価な工場製品に負け廃業したとみられ、大正三年には姿を消している。

醸造

酒・醤油の醸造は、地域の消費量は、地域で生産するのが普通で、特に酒については貴重な米を消費するので各藩に届出て許可を得て生産するのがたてまえになっている。醸造元は、庄屋・地主など資産家層が常であった。越後などから杜氏（酒つくり職人の長）をよび寝食をともにして麹づくりからはじまっての一連の仕事は職人業であった。

味噌・醤油は、麹を買ってきて自家製もあったが、特に醤油は酒と同様に消費者は買い求めるのが普通で、各村には醸造元があった。

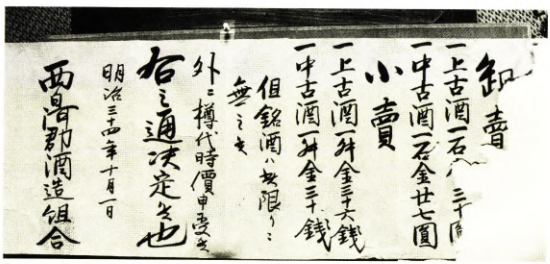
明治になると、しばらくの間は従来の生産形態が継続したものの、やがて企業家が他地域への販売を視野に大量生産をはかるようになる。

酒造は矢吹町に三戸、三神村に三戸あり、矢吹町の生産石数は大正三年に一〇八三石と上昇し、三神村は一九二石に減少している。かつて中畑村にも醸造元はあったがこの時期までに廃業している。焼酎は、清酒づくりのかたわら生産された米焼酎であったと思われる。矢吹の大木酒店の「松緑」は全国清酒品評会で一等賞になるなど（大正二年）矢吹の酒は全国的に有名になる。現在醸造元は大木代吉本店一店となっている。

醤油は、矢吹町に二、中畑村に一、三神村に三戸で大正三年にはあわせて二九九石つくっている。最後まで残った筑前屋醤油醸造元は平成にはいって醸造をやめたので現在は一店もない。

【写真81】絵紙　清酒醸造　中畑岡崎本店

【写真82】絵紙　醤油醸造　中畑千代倉



【写真83】清酒卸売値段表　明治34年

精麦・精粉

古来水車を利用しての精米精粉は各村にあり、「車屋」などと称されている。四六時中水車をまわし依頼を受けて稼動した。大がかりな精麦・精粉工場は、大正三年矢吹町に大木水力工場があり、職工八人で操業している。精米一か年二〇〇〇俵、製粉一か年五一〇貫、製麺一か年五万貫を生産し、原料の小麦は近隣町村の産出によるものであった。

製油所

中畑村に製油所が一軒あり、菜種油、胡麻油、荏胡麻油などを搾り、油と油かすを生産している。職工は一人なので搾油機を持ち個人作業による製油所と思われる。

製茶

現在矢吹には製茶業はないが、古くから茶は、自家で茶の木を栽培し葉を刈りとり、それぞれ製茶していた。明治十七年の西白河郡茶業組合の人名簿には、茶製造販売人として矢吹村に七名、中畑新田村一名、明岡村一名、大和久村一名、中畑村六名の名が記されている。それぞれ認可を得て生産していた。明治四十二年になると、中畑村七戸、三神村二戸となり、矢吹町の記録はない。矢吹の製茶は、明治の末で終り、各所にあった茶の木も整理されたと考えられる。良質茶の大量移入は地元の製茶業を衰退させる原因になったのかも知れない。

金物製造

鉄工所は矢吹に四軒あり（大正三年）職工は一〇人いた。鍛冶屋は、鉄製農具の修理や、農具の鍛造に欠かせなかった。鍛冶屋は技術が問われる職人の仕事で製品の善し悪しは親方の腕しだいであった。特に刃物を手がける職人は尊重されている。

陶器

矢吹で唯一の陶器で三神村神田藤井金次が明治十九年創業した。石川郡沢田村・東白川郡宮本村の石綿と西郷村の粘土を調合して生地をつくり、手捻製で低火度で焼いたものである。石綿焼・神田焼として、茶わん・急須・湯冷・湯沸・盆・花瓶などを生産した。明治三十三年には皇太子殿下に献納されたり、第五回内国勧業博覧会に出品するなど、珍重され造形的には評判となったが、

【写真84】石綿焼火瓶

材質のこともあり量産販売するまでにはいたらなかった。

そのほか　大正三年には菓子製造業が、中畑・三神に各一店、矢吹に六店あり、いずれも職人による製造と販売で当時は「下り菓子」（他地域製造の菓子）の販売は稀であった。また竹製品の製造所が二戸あり職工五人とあるが、これはいわゆる職人を指していると思われる。

二　矢吹町の職人

（一）矢吹町の「統計調査」から

町内の職人の状況についての資料はほとんどない。わずかに『郡統計書』『郷土誌』の統計があるが、前述の各表に示す資料と、矢吹小、三神小の『郷土誌』には酒と醤油の項目に若干の記載があるもののそのほかの統計は空白である。中畑小の『郷土誌』には昭和七年次と八年次のみの、油、醤油、菓子類、木箸、籠・笊、製茶に関する記載があるものの売上高だけであるので内容は把握できない。

これらの商業統計では産業分類がおおまかで、商人、職工、職人の区別ができないので職人の動向を読みとることはできないが、商人以外にも店を構えて商売をしている職人も軌を一にしているものと推測できる。

【写真85】絵紙　菓子製造　矢吹新田東屋

（二）職人の動向

職人について　職人の語は時代により意味の違いがあるが、ここでは近世以来使われている手工業者という意味で使うことにする。手工業者についても、明治時代以降になると工場労働者を職工などとよぶようになり、「職人」は伝統

的な手工業者を指すようになっていった。

白河のような城下町には職種に応じた職人町などが形成されたが、小規模な宿場町の矢吹にはそうした職人町はない。しかし町内には数多くの職人たちがおり、矢吹町に住む人びとは必要に応じてさまざまな形で身近な職人を頼りにしてきた。職人は土地に依存しないで「技術」によって生活する。ようするに「わざ」を飯のたねにして生活しているが、「わざ」を発揮する場によって「居職」と「出職」にわけられる。「居職」とは鍛冶屋とか仕立屋のように仕事場としての店や工場を構え、そこで生産、加工する人たちをいい、「出職」は左官屋や屋根屋のように自分で道具を持って依頼先に出向き、そこで加工、修理をしたりする人たちを指している。居職は店を構えて商売をしている点で商人と区別しにくいが、商人を規定しておくならば、生産者と消費者を商品の売買をとおして媒介することによって、その間の利ざやで生計を立てる人といってよい。つまり商人は自らが生産にはかかわらず、商品の流通の部分に関与しているのであって、自分で生産をして商う居職とは異なる。

職人の社会　職人の社会では親方と職人、その下に位置する弟子とにわけられていたのが普通で、こうした階層は「徒弟制」と「年季制度」によって維持されてきた。徒弟制は親方のもとに弟子入りし、親方から訓練を受け、自らも経験を積みながら技術を修得するしくみをいう。訓練、修養のための約束の期間を「年季」といい、それがあけてはじめて職人として一とおりの仕事をすることができるようになる。こうした形で「わざ」は継承されてきたのであった。しかし第二次大戦後は職業訓練学校や専門学校のカリキュラムをとおして「わざ」を修得することができるようになり、長い歴史の中で培われてきた「徒弟制」や「年季制度」はしだいに形骸化していくが、職人の「うで」の良し悪しは訓練と経験によって培われるという点はかわっていない。

職人調査の意義　矢吹町史の民俗調査の過程で、矢吹町内には多くの職人さんがいることがわかったが、職人の世界も大きく変化している。職人になる過程や職人の持つ技術は、長い間に培われてきた民俗であるが、親方から弟子へ、あるいは親から子へという徒弟の関係の中で、目にみえない「わざ」として継承されてきたものであり、民俗社会はこうした

「わざ」によっても支えられていたのである。社会の変化にともなって、伝統的な「わざ」の継承そのものが危機に瀕（ひん）している今、わたしたちは職人の道具を収集し、「わざ」を記録しておくことが必要であることを痛感する。ここでは矢吹の職人さんの、一部の方々に聞き書きをしたので、これをとおして矢吹町の職人の世界の一端を知ってもらい、その記録の手立てを考えていただきたい。

（三）職人の聞き書き

1　箒づくり　樫村文男（大正八年生れ）

箒は須賀川の特産品なんです。栃木県の「鹿沼箒」や千葉の「沼田の箒」なんかも有名ですが、ここの箒は特に「須賀川箒（すかがわぼうき）」とよばれてたんだない。んで、今やっている家があっかどうかわかんないですが、旧石川郡小塩江村の堤あたり（須賀川市小塩江）には箒をつくる家が何軒かあったんです。須賀川箒は肩のつくりに産地の特徴があって、装飾もほかのとことは違ってます。以前は箒は家庭の必需品だからどの家でも何本かはかならずあったし、学校や工場でもたくさんの箒が必要だったんで忙しかったんですが、だんだん電気掃除機が普及してきたり、家の床のつくりもかわってきたもんで箒を使わなくなったの。箒は必需品でなくなったのね。

おれげの親父は保蔵といって明治三十九年（一八九九）生れです。小塩江村堤の安藤っつう家の親父のおんつぁま（親父の母の姉のだんな）が箒づくりしてた人なんです。親父は器用な人で竹細工なんかもやってたもんで、おんつぁまの箒づくりをよくみててそこで覚えたらしい。弟子入りしたわけではねぇんです。いや、親父もはじめから箒づくりの商売をしていたわけではねぇんだない。おれのばあさまの従兄弟が矢吹で牛乳屋をしていて、その人から配達手伝ってくれって頼まれたんで、親父は家を舎弟に任せて、とりあえず大正十三年（一九二四）に一人で矢吹に出てきて牛乳配達やりながらそのままこっちさ落ちついちゃったんです。んでも、当時は景気悪くて牛乳配達なんどではだめだということで、しばらくして牛乳屋を辞めて自分で箒づくり

はじめたの。はじめは五軒長屋を借りて後でそこを買い求めて、表の方を直して「各種箒製造販売」の看板をかけて箒屋の商売はじめたんです。

おれは大正八年（一九一九）、須賀川の奥の石川郡田中つぅとこ生れなんだが、小学校二年のときに親父の住む矢吹に出てきて矢吹小学校に転校しました。学校出た後はいろいろ勤めてましたが、兵隊から帰ってきた昭和二十一年（一九四六）八月から箒屋の跡継いだんです。親父はずーっと箒屋を続けていて、おれもつくったんだがおもに販売の方を担当しました。あのころはバイクも車もないから、箒を自転車につけて商店に卸しによくいったもんです。つくる方では親父の弟子にはいったわけではなく、親父がつくるのみてて覚えっちゃったんだない。

「五叉路（ござろ）の箒屋」とか「箒屋」っていえばおれげのことだってだれでも知ってんだね。前はおれが教えた人もあって商売やってたようだが今は矢吹には箒屋はおれだけになったから、おかげで「箒屋の文男あんにゃ」っていってもらえればわかります。もう商売はやめましたが、今でも趣味で箒をつくってんです。

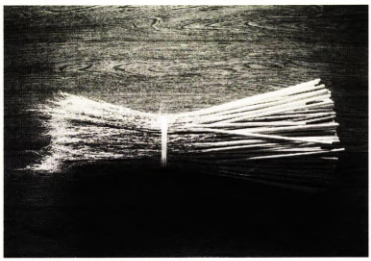
箒の種類

うちでつくった箒は「座敷箒」と「竹箒」だない。座敷箒っていうのは部屋掃く箒で、竹箒は外で使う箒だ。座敷箒にも種類があって、ナガエ（長柄）と柄の短けえテボーキ（手箒）、それに柄のないバンボーキ（盤箒）がおもだね。竹箒には長柄のタケボーキと柄の短けえコボーキがあります。座敷箒は箒草でつくるのが主で、竹箒は竹の葉（枝）を使うんです。

ホーキグサの栽培

座敷箒はホーキグサ（箒草）使うんですが、箒は一年中つくっているわけだから、材料は鹿沼の問屋にいってわが眼でみて、めかたかけてキロいくらで仕入れてきたんです。んでも二反歩ほどホーキグサを栽培してました。今でもちーっとつくってます。

ホーキグサはオカボをまくころ、つまり四月下旬から五月はじめころ種をまきます。ウネ立てて、そこにサラサラとまいていく。厚まきして間引きしないと細いのができる。細いものはシンタチっていって枝が半分にもなんねえし芯がたちます。芯たっ



【写真86】ホーキグサ（提供　樫村文男）

たものはすぐ折っきょれっちまうんだ。んだから厚まきしないようにして一〇センチメートルおきくらいに生やさないとだめ。そうしっといい穂が出る。出っとない、早いものは旧の盆前に収穫できた。丈は二メートルくれえかなぁ。穂が出てから中に実があんまりはえっちまうと穂先が真っ黒になっちまうから実が赤みがかったときに、穂が出たところの最初の節のところを引っ張って折っきょればいいんです。旧暦のお盆ころ一度収穫すっと、折ったところから二番ぼ（穂）が出てそれも使われます。

収穫は人を頼んでやりました。というのはとった日に実を落とさないと実が落ちない。んだから人を雇ってどんどんとって、すぐ脱穀機で実を落とす。実を落とした穂は家のそばの畑に長い台をおいて天日に干すんだけども、いつまでも干しておくと白っぽくなっちゃうから、日にあてないように穂先の方に筵かけんの。青い穂が特徴だからね。いい天気のときに三日から四日くらいかけて干すんです。干した後は並べて切る。用途にもよるが長さは二〇センチメートルくらい切り落とすかなぁ。

座敷箒づくり

箒づくりはあぐらかいてする仕事です。んでもけっこう力もいるし、準備が大変です。座敷箒はホーキグサでつくるんだが、穂先が曲がったホーキグサもあっかんない。曲がったのは集めてそれなりに処理すっけんとも、節あんのはだめなのね。折れっちゃうから。いいやつを中にして湿して打ちながら、シンタチっていう細くて悪いものを表に出る方にアテクサ（当て草）に使います。ぺたんぺたんたたきながら平べったくするわけだ。それを繰り返して形を整えて二一番線の針金とか真鍮線で綴じていく。で、柄は柄竹を尖らせた方をまくって刺し、刺してから適当な長さに切り落とし、最後に釘を打って留めます。それから綴じ鋏を使って針金できちっと綴じていくが、綴じのときは針金の支えを挿しておいてまっすぐになるように刺す。その後千鳥がけっちゅうんだけども、赤と青の糸を使って千鳥に編みこんだりします。普通は赤糸で綴じることも多いです。これを「箒を

綴じる」っていうんだ。糸でかがるのは女の人にやってもらってました。

手箒はこれでいいんですが、長柄は半分にわけて左右対称につくります。まず片っぽうの穂先を五本つくっぱい、もう一つ同じものをあわせてしばってやるんです。こうしないと大きくてつくれないし、まっすぐになんないもんね。そこに柄を刺しこむんです。んだから長柄は要領よくやんねぇと大きくなっちゃう。

できあがったときに穂先をそろえんのに切っけんとも、あんまり切っちまうとだめになっちゃうかんなぃ。つくっときに穂先の寸法をあわせるから、できあがりはだいたい同じ長さになる。手箒は柄の長さは一尺くらい、長柄の方は四尺二寸くらいです。

柄をつくる

座敷箒の柄は染めたのでないとかっこ悪いべ。商売してたころは柄も問屋で仕入れて送ってもらったりしたが、つくることもあるんだ。竹は真竹です。農家から竹を買い、あぶって竹の油抜きをします。曲がってんのはあぶってまっすぐにしながら手で調整とります。買ったものもあれば籠屋で使わないウラ竹（先の方）を譲ってもらって竹箒に使うこともある。長柄は染め粉で染めます。竈の上に縦に切ったドラムをおいてそこに柄竹と染め粉をいれて、赤とか青とか赤青とかに染めるんですが、ダークブリューっていうドイツの染め粉を加えて煮ないと着色がうまくいかないんです。これは薬局に売ってました。

ミゴボーキとバンボーキ

普通の箒は値段が高いから学校の箒っちゅうのはいいもの使わねんだ。よくミゴボーキを六〇本とか八〇本とか学校の新学期になると納めました。安物の箒です。工場でもミゴボーキ使うとこもあったなぃ。ワラミゴボーキともいいました。須賀川の奥の在の方の小作田しているような家のばあさまたちは、ワラミゴ買いにくんの待ってんだもの。ワラはそういうところから一貫

【写真87】座敷箒（提供　樫村文男）

目いくらで買ってきました。アテクサにホーキグサをあててやるといい箒になるんだが、学校の箒は赤モロコシのカラを買ってきて、これをアテクサにしたのない。

バンボーキは一尺程度の長さの柄のない箒で、パン屋がね、盤台を掃いたり、床屋が毛を払うのに使ったもんだ。格好もいろいろあっけんとね、おれは穂先長くしてつくったです。悪い細いホーキグサ使うんですが、きちっとした止め方があんの。持つとこに布巻くといたくなくていいんだけど。

竹箒

籠屋も竹箒つくっけんとも籠屋の竹箒と箒屋の竹箒は違うのね。竹箒は葉っぱ（枝のこと）とって丸めっといいんだが、ただ柄にゆっつけておくだけでは抜けっちゃうんだ。組んでいくときにひっかかりを四か所つくっておいて、そこに針金をとおしてゆっつけておく。こうしてほかの葉っぱ挿していく。ひっかかりをつくっておくとぜったいに抜けないんです。小箒もつくり方は同じです。

竹箒の材料は孟宗竹でなきゃだめです。葉っぱ丈夫だし切んにぇ（切れない）から。真竹なんかだと折れやすくてカリカリしてだめだ。孟宗を切った葉っぱを譲ってもらうんです。竹問屋があんだげんと、竹切ったなんて聞くといくんだ。枝落としたらそのへんにぶん投げておいてもいいが、人を頼んで束ねてトラックなんかで運んで、前の畑さ寝かせておいて、時々ひっくり返すとひとりでに葉っぱ落ちるようになんだ。そのままおくと黒くなっちまうし、ぽろぽろほけっちゃうから、雨にあたらないようなところにしまうんです。雨にあてなければ何年でももつんだ。使うときは寸法をとってそろえるわけです。

道具

道具は細かいものが多いんです。ノコギリは柄竹切ったりする。センは柄竹を削る。綴じ鋏、

【写真88】竹箒（提供　樫村文男）

槌、包丁、針金巻く棒、ヤットコ、ペンチ、畳針、もみ錐、実を扱く道具、針金、糸などです。ほかにもあります。

販売

販売は自転車にのせて商店で卸してくんです。白河や浅川、石川、それに郡山にもいった。須賀川は地元があっからいかないの。長柄は自転車に横につけっとだめなんだ。よく警察におこられたもんだ。ラベルははんなかった。「矢吹の箒屋」でとおっていたから。

そのほか

おれは弟子とったりはしませんでした。箒屋は矢吹に一軒だけだったから同業者の組合もなかったです。縁起かついだりもしなかったです。おれの親父は竹細工もやっていて籠屋にも教えたの。おれの親父は篠竹使った笊だの籠もできたかんない。篠竹の細工は面倒なんだ。この辺には籠屋が何軒かあって親父はよく籠屋に教えたの。

【写真89】箒つくり道具（提供　樫村文男）

2　指物師　長倉新郎（大正六年生れ）

手に職をもっているなら生活が安定するということで、一四歳のころ指物師の弟子にはいった。親方は白河の年貢町の「かわいまさのぶ」という指物大工で、かなり厳格な親方であった。

親方のもとに住みこんで、朝八時から夜一〇時まで働いた。仕事は順序だてて教えてもらうわけでなく、「これをやれ」といわれてやらせられた。教え方はかなり厳しい。弟子時代、道具類は自分で買いそろえたのではなく、親方からもらったので自分でそろえる必要は特になかった。弟子のときの休みといえば盆と正月だけだった。小遣いは当時（昭和初期）のお金で五〇銭くらいである。修業中でうれしかったのは三度の食事であった。ただ弟子の間はお茶がなく、職人にならないとお茶がでなかった。

【写真90】指物師道具（提供　長倉新郎）

弟子の修業は五年くらいで、その後お礼奉公をするが、この親方には半年から一年のお礼奉公をするものであった。親方から道具をそろえてもらっているので、年季明けのときには必要な道具類はほぼそろえることができた。職人は人から聞いてはいけないとされていたので、技術は目で盗んだものである。独立した後も親方とのつきあいは続き、盆暮れにはあいさつにいった。

職人になってからは東京に出て働いた。道具箱を担ぎ汽車にのって今の文京区にいったが、勤め先が椅子屋で、自分は椅子がつくれなかったため家具屋をみつけて仕事に就いた。昭和十四年（一九三九）に召集令状がきて兵隊にいった。

おもに箪笥（たんす）を製作しており、前面だけ桐を使う「前桐」、前面と側面を桐でつくる「三方桐」、すべてを桐材であつらえる「総桐」などがある。材料は桐と杉材がおもで、仕入れは「木取り」に頼んでいる。稼ぎどきは結婚式の多い時期で、得意先は特に開拓するということはなくお客さんの方から頼みにきたものである。箪笥は一棹できるのに四日から六日かかるが、急ぎの仕事のときは三人がかりで一日でつくったこともある。箪笥は乾燥に時間がかかるが、このときは乾燥させるのに火をどんどん焚いて乾かして完成させたことを覚えている。

仕事の手順は以下のとおりである。①木取り、②寸法にあわせて板をくっつけていく、③加工、④組み立て、⑤仕上げ、⑥塗装、⑦最後に金具つけとなる。塗装は染物屋で使う「やしゃ」という木の実を混ぜあわせた「との粉」を使う。道具としてはカンナ、ノミ、ノコギリ、曲りがね、一尺ざし、二尺ざし、三尺ざしなどがある。

建具屋も大工と同じで、太子講には掛軸をさげて拝む。祭りというほどではないが、十一月の太子講のときは仲間と集まって食事をして酒を飲むなどした。

職人は腕が大事だが、なによりも大切なことは身体を大事にすることだと考えている。身体が丈夫であれば、仕事を続けるこ

とができるのでなんでもできる。

3　指物師　小林三郎（昭和四年生れ）

弟子入りは昭和二十年十月ころのことで、父の弟（叔父）の小林勝美という指物師である。叔父は自分の父から技術を修得した人で、かなりの腕前の指物師といわれており、特に戸障子の評判がよかった。叔父の下で五年ぐらい修行した。

家の脇が作業場だった。まず道具類の研ぎ方や使い方から覚えはじめるが、親方自身は絶対に教えてくれなかった。職人は目でみて、盗んで覚えるものだといわれてきた。道具類は自分の給料を貯めてそろえたもので、当時カンナが五〇円、ノコギリ一五〇円であった。弟子時代の休みは旧正月とお盆の期間約七日、仕事がきれたときくらいであった。小遣いも月に三〇円くらいもらうことができ、やめるころには一五〇円になっていた。つらいことは特になかったが、仕事がよくできたときや誉められたときは嬉しかった。

お礼奉公は特になく、年季があければ一人前として認められた。そのときに親方から背広をつくってもらった。自分の叔父であったので、ほかの弟子のように特別なつきあい関係をするということはなかった。得意先は口コミでついてきたものである。製品の種類としては戸障子、ふすま、ガラス戸、板戸（雨戸）、欄間、家具類、茶箪笥、火鉢、机などである。製作工程と用いる道具は、①荒削りにはカンナを使う。カンナは荒削り、中削り、仕上げとある。②スミつけ。小刀は白書（しろがき）ともいい、これでスジをつける。巻尺（小さい曲尺）も用いる。③刻み加工。ノミで穴をあけ、ノコギリで仕口。④組み立て。組み立てはハンマーでおこなう。⑤総仕上げ。仕上げカンナで目違いを削る。⑥とりつけ。カンナとノコギリを使う。これらの道具の手入れは毎日おこなっている。

指物師の勘どころは組子の仕口にあり、このでき具合が重要になる。特に組子の丸面をとることに一番気をつかう。

材料の種類はマツ、スギ、ヒノキがおもで郡山から仕入れたが、現在は建具専門店から仕入れている。かつては材木で購入し

て製材工場で製はんしてもらった。

神にたよることは嫌いなので職業神は特にない。たよるのは自分のみと考えている。つくるからには人に負けたくないし、よいものをつくりたいと思っているが、完全なものは一生できないので、一生研究・努力であろう。

4　大工職　梅宮篤哉（昭和五年生れ）

親が大工をやっていたので昭和二十五、六年ころ、親について修業にはいり、親から三年間ほど手ほどきを受けた。父親ながら親方は仏様のような人で、めったに怒らなかった。親と同居しながら技術を修得したが、特別順序というものはなく、親方もとても丁寧に教えてくれた。道具は自分で購入せず、親から受けついだものがほとんどだった。小遣いは特別必要なかったし、土、日も関係なしに働いたが、盆と正月、彼岸などは休みだった。修業中つらかったことはあまりないが、うれしかったのは、自分の手がけた仕事が完成したときだった。年季明けには親方から大工道具一式をもらった。年季が明けてからお礼奉公をしたが期間は一、二年程度であった。職人になってから、得意先は口コミで広がるもので、評判がよいとなれば依頼がくる。

仕事の段取りは次のとおりである。①木ぶるい。木取りのことをいい、この木材はどこの柱に使った方がいいかなど、木材を選ぶ作業である。②スミつけ。カネばかりを使い、何尺のところにほぞ穴をつけるなど計り、スミをつける。③穴あけ、ほぞつけ、④上棟式。さまざまな作法があり、兜（かぶと）やカブを書いた矢羽根を棟にあげ、棟梁が祝詞をあげる。その後それぞれの職人が仕事にとりかかる。

大工の使う道具には、ノコギリ、カンナ、ちょうな、まさかり、すみつぼ、曲尺、かなづちなどがあり、尺杖は親方が一本しかつくらないものである。現場に尺杖を一本しかおかないのは、同じ尺でもそれぞれに手くせがあるために微妙に違い、尺杖を二本も三本も使うと誤差ができてしまうためであるという。

仕事にとりかかったならば、いいかげんなことはやらないでまじめにやり、お客さんの立場に立ってやることが一番大事であ

ると考えている。

十一月の太子講には掛軸をさげて拝む。これは聖徳太子が職人の役割を決めたからだといわれており、家づくりの職人の賃金も聖徳太子が決めたものといい、木挽きの賃金は大工の手間に一升二合を上乗せして支払うものだといわれている。縁起をかつぐこともあり、仕事にとりかかるときは仏滅、三隣亡をさけよい日を選ぶものという。

5　大工職　奥川由治（昭和八年生れ）

親が大工をしていたので、一七歳のころ親のもとに弟子にはいった。かなり厳しい人で、親ということもあって厳しくしつけたのかもしれない。

弟子にはいりたてのころは、もっぱら穴堀をさせられた。仕事は穴掘からはじめ、カンナがけ、道具砥ぎ、目立て（ノコギリの刃を立てる）の順で覚えさせられた。道具類は親方からもらうので、自分でそろえるものは特になかった。家にいたので特に休みをもらうということはなかったが、小遣いは少しもらう程度である。修業中で最もつらかったのはスミつけである。うれしかったのは、上棟式で矢羽根を立てることができたときであった。弟子になると三年ぐらいで一人前になれといわれたが、自分は弟子を八年ぐらいやらされた。お礼奉公はしなかったが、一人前になったときには親方から大工道具一式をもらった。二〇歳になったときには、はじめて一軒の家づくりを任せられた。

仕事の手順は次のとおりで、①土台、柱、桁、梁、もや材（屋根の材料）をそろえる。②造作材（敷居、鴨居、床材、天井の材料）をそろえる。③加工。④とりつけをおこなう。基本的には、ここまでが大工の仕事で、これ以降は屋根屋などそれぞれの職人たちが手を加えていく。用いる道具は尺杖、金ばかり、カンナ、ノミ、ノコギリ、丸のこ、ドリル、穴掘り機械、移動式機械などであるが、このほかにもこまごまとしたものがある。

大工は「仕上がり上手」といわれることが一番の誉れで、特に最初のスミつけからが一番大事だと自分は思っている。材料の

土台はクリの木、柱はスギとケヤキ、梁・桁に使うのがマツ、というように用材を使いわけた。

お客さんがみていて、「立派な家だな」と評判がよければ依頼がくるもので、人々はよくみているので自分から売りこんだということはない。

奥川さん宅では、毎月二十一日には聖徳太子の掛軸をさげて食事や酒をのんだ。なぜ二十一日なのかはわからない。また十一月には太子講をする。

大安などよい日を選んで上棟式をやった。禁忌の一つに「柱を逆さに立てるな」というものがある。これを逆さ柱というが、逆さ柱はことに嫌われるもので、場合によっては柱のモトとウラがわからないときもあり、そんなときは柱を水に浮かべると、根っくしだった方が水に沈むので、それでモトとウラを判別した。また、材木のモトとモトとをつなぐと「別れてしまう」ため縁起が悪く、必ずモトとウラをくっつけるようにした。

上棟式で使う矢羽根に書くのは「カブトの角」で、これには四方の厄除けの意味がある。また、野菜のカブを書くこともあるが、家のかぶがあがるようにといった意味をこめたものである。

理由は定かではないが、上棟式の翌日は必ず休みにするものである。

6　左官職　上野由男（大正十三年生れ）

三城目生れで、兄が左官職をしていたので昭和二十年（一九四五）に自分も左官屋に弟子入りした。親方は三城目の加藤寅雄さんである。親方はとてもやさしい人で、腕もよかった。弟子の間は通いで習った。仕事は木舞い（こまい）のかき方と土こねなどから教わる。親方が手取り足取りするのではなく、ほかの職人と同じくみて覚えろ、という指導の仕方であった。道具は自分で買いそろえた。小遣いは少しもらったが、金額はいくらとは決まっていない。また休みは、盆、正月、それに雨が降って仕事が出できない日などであった。弟子のときは、仕事が思うようにできなかったときがつらかったが、仕事を終えてから親方と

一緒に酒を飲むときが楽しかった。年季が明ける時期は特に決まっていないが、自然に独立ということになったと記憶している。従ってお礼奉公はなかったが、親方のところには盆暮れにあいさつにいくつきあいをした。

仕事の手順は、①木舞いかき、②内壁塗り、これは篠竹をたて、よこに編んで、荒壁を内側から塗る作業である。③かえし壁といって外側から壁を塗っていく。④大工さんが造作する。⑤砂壁を塗っていくが、これをぬきぶせともいう。

勘どころは「ちりまわり」というが、柱のまわりをいかに平らに塗っていくかという点である。真ん中はへこんでいても構わない。ちりまわりを平らに塗っていけばおのずと真ん中も平らになるからである。ちりまわりがデコボコになっていると全体の仕上がりが悪くなってしまう。

家の壁を塗る場合は大津壁と漆喰がある。「大津壁」は粘土をこね、「つた」と石灰を混ぜたものを塗るもので、「漆喰」は「つのがたのり」（海草）をつたと石灰に混ぜてつくる。つのがたのりが悪いと仕上がりも悪くなる。土蔵の場合は「のろかけ」といってつのがたのりと石灰を混ぜたものを漆喰の上に塗る。これを塗るとつやがでる。松煙（松をいぶった煤）と「のろ」を混ぜると真っ黒くなるが、これを塗るとやはりつやがでる。さらに、雲母の粉である「きらら」を手ぬぐいに包んで壁をたたいていく。こうするとつやがさらに増す。

用いる道具は荒壁塗り用のコテ（荒ゴテ）、仕上げゴテなど各種のコテ、ふね、などである。材料は矢吹の叶屋、丸星（今はない）が主でほかは須賀川から仕入れた。

仕事は自分から売りこんだことはしない。向こうから依頼がくるようになった。

縁起かつぎや禁忌に関しては、お客によってはよい日を選んで仕事をしてほしいと頼まれることもある。また、特に夏の土用というが、全般的に土用の日には、「土をこねるな」といわれている。これは、夏の土用には湿気が多く、土が水分を多く含んでしまうので「仕上げ後の乾きが悪くなる」からではないかと考えている。壁の乾きが悪いと中に編んだ篠竹が腐ってしまう場合もある。

7　籠職人　高久仲二（昭和七年生れ）

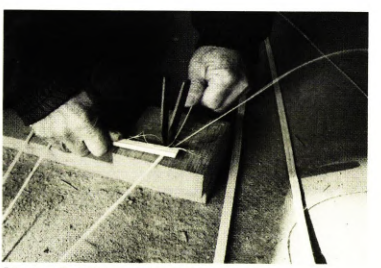
画家を目指したが断念し、昭和二十一年（一九四六）に根宿の野崎留太郎という親方のもとに弟子入りした。親方はとてもまっすぐな性格をした人で、教え方も丁寧でなるほどと思わせる指導をしてくれた。後年、工芸品の技術を修得するために県立農業短大の奥にあった「職業補導所」に通ったことがある。

弟子になってからは中畑の自宅から親方の家に通ったが、当時は食料難であったので弁当持参であった。仕事を覚える順序は特になかった。道具は自分で鍛冶屋にいって注文してつくってもらった。小遣いは正月に一〇〇円、休みは祝日、刈りあげ一〇日、八槻様の日などである。修業中最もつらかったのは、寒いときに冷たい竹を切るときや、スミつけであった。三年修業をして年季が明け、そのとき親方から草刈り籠をもらった。草刈り籠を一日に四つつくることができれば一人前、六つできると一丁前といわれている。

お礼奉公はしなかったが、親方とはその後もつきあい、親方の身内で不幸があった場合なども、葬列の提灯持ちなどをした。

注文があるとそれに応じて製作する。つくっていたのは目籠、これは「めぇかご」といい、「まえかえかご」と「みけかご」などともよばれている。蕎麦あげ笊、炊納（すいのう・小さなもの）、「ダース籠」とは一ダースの瓶をいれることができる籠、ハケゴ、ワラダ籠（丸蚕座ともいう）、エビラ籠（繭をつくるときにここへ蚕をあげる）、ショイ籠、タガラ籠（高久氏によれば、もともと炭鉱現場で使われた籠で、炭鉱籠がタンカラ籠に転訛し、それがタガラ籠になったという）、ザル籠は別名「闇籠」ともいい、中身がみえないようになった籠

【写真92】籠職の道具（提供　高久仲二）



【写真91】籠職の材料つくり・幅そろえ（提供　高久仲二）

である。竹に木灰をまぶし、水をかけて磨くと汚れが落ちる。こうして磨いた竹を「磨き竹」といい、ザル籠はこの竹でつくった。籠の製作の勘どころは、形やみばえなどで、その人の美的感覚が問われる。

用いる道具は、竹切りノコギリ（一寸に刃数が二一から二二枚ついたもの）、竹の節を削る「せん」、両刃の竹割りナタ、やはず（これに針金を巻いてフジをとる）、丸ノミは竹を直角に曲げる場合に、たけの中を削るために使う、モミギリ（穴を開ける）などである。

材料は真竹で、工芸品はほとんど真竹であるが、草刈り籠には孟宗竹を使う。柿之内地内では立派な竹がとれたところであった。材料の竹は十一月から一月までの間に切るものとされている。それ以外の季節は竹が水を多く含んでしまい、竹製品にしても早く傷むために切らない。

籠屋には職業神はなかった。聖徳太子の下には一一人の職人がいたというが、その中に籠職人はいなかった。そのため大工などと異なり籠屋は聖徳太子を祀ったりはしない。ただ、縁起をかつぐことはあり、品物を納めるときは仏滅は日が悪いのでさけた。また唐丸籠は昔、罪人に被せた籠といわれているのでつくらなかった。

【写真93】籠あみ（提供　渋谷良雄）

【写真94】籠製品

8　仕立職　猪合昭博（昭和十五年生れ）

親が仕立職であったので、昭和三十一年に親から技術を習った。親方としての親は厳しいときもあったが、いつもそうではなかった。弟子にはいって最初は針を使えるように指導されたもので、教わる順序に特別なものはない。道具は親から受けついだものがほとんどであった。小遣いは少しもらう程度で、休みは祝日や、盆と正月、祭りのときなどに限られていた。修業中つらかったのは、仕事が終らず夜の十一時から午前零時ころまで残業が続くようなときで、場合によっては夜中の二時ぐらいまでやったこともあった。形ができあがったときがいちばんうれしかった。五年ぐらい親のもとで修業したが、年季があけるときには裁縫道具一式をもらった。

二〇年ほど前のことであるが、郡山で東京から講師を招いて裁縫の講習会が開催されたことがある。受講者は一〇人ぐらいで、講師から裁縫のポイント、裁断、寸法のとり方などを教わり、とてもいい勉強になった。

仕事の手順は、①布地をそろえるところからはじめる。生地などの材料は卸屋から仕入れる。②蒸気をかけて、生地をつまらせる。これは蒸気で生地を縮めるのである。③型紙で型をとり裁断する。④仮縫い。⑤その人にあうように補正する。⑥本縫い。⑦仕上げ、これをまとめという。ここまでで約一週間から一〇日かかる。襟、袖つけが難しく、ここが仕立職の勘どころである。依頼してくれた人の希望に沿えるものをつくることが最も大事である。

道具は針、ミシン、アイロン、はさみ、目打ち、ものさし、腕木（腕を休めるもの）などで、道具の手入れはミシンに油をさす程度である。

得意先を開拓するなどということはないし、あえて宣伝することもないが、結婚式などのときや、近く還暦を迎える人と同席したりすると、「こういう服どうですか」などと勧めたことがある。

仕立職の職業神は特にない。しかし品物を納めるときは、仏滅は日が悪いのでさけた。洋服は「良い服」ともいい、「福（服）を呼び込む」ともいった。

（四）そのほかの職人の仕事

石　工

三城目石・白河石など良質の石を産出することから石に関する職人は割合と多かった。セメント工事が多くなかった時代には、家の土台石、カマド、風呂、石垣、石塀、石蔵、石灯篭、墓石など用途も広かった。石工は大別すると石山から石を切り出す仕事と、石材を加工して整形する仕事がある。両方を手がける人もいたが、細かい細工物は、彫刻技術を修行しなければならない。

いずれも弟子入りして五、六年修業して一人前になる。

石山から切り出す石取りは、石の目を見極めて割る。この目をみることができないと割った後、用材に適さない石くずになってしまうという。石に一〇㌢間隔に矢（鉄くさび）をいれる。矢を打つことを「矢じめ」といい、石の割れ具合をみてハンマーで交互に打つ。ハンマーの柄は三尺以上の「うしころし」という丈夫な木でつくる。割れるとテコで落とす。石に穴を刻みハッパ（ダイナマイト）を使うこともある。

切り落した石は用途によって、ノミで割り石材として整形する。山でとった石を運搬するのは木の枝をしいて「修羅」をつくりひいて道路まで運んだ。

石材を加工する石工は、製作する物によって石材を選び、まずノミで大とりをして、ノミ・チョウナを使いわけして削って整形する。最後に砥石で、荒・中・細の三段階で仕上げをする。墓石や燈篭などは部分をつくり組みあげていく。

最近は御影石（花崗岩）の輸入がふえ、需要もましているところから、石切りの石工と細工をする石工はそれぞれ専門化していることが多い。

石工は企業化し、最近では工場で機械生産になってきている。

畳　職

日本家屋で多用される畳は、その部屋の風格にも関係し、立派な部屋の畳をつくる職人の仕事は極めて重要な役割であった。上の間にはへり付畳を、居間には畳表を折りこんだへりなし畳を使用するのが普通であった。

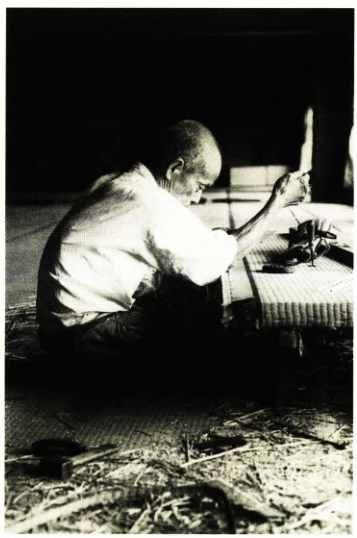
畳職人は仕事場で芯になる「床」を、藁を重ねて縫いあげ、注文の部屋の間尺にあわせて裁断し、畳表を縫いつける。熟練を要する仕事で弟子入りして修業して一人前になる。

床からつくるのは大がかりな設備が必要なので、町中の畳屋は床と表は他所から仕入れることが多かったという。

畳屋の仕事で一番多い注文は、表がえで、汚くなった表を新しいものにかえることと、裏返しをして再び使うようにすることで一般家庭では表の両面を使ってから新しい表にすることが普通であった。また床をかえることはほとんどなかった。

表がえは、各家庭に出張してその場でするのが普通で、竹行李でできている道具入れ（なぜか畳屋の道具入れは竹行李）に、ヘリをとめるヘリシキ、ヘリをまくるカヘシ針、ヘリを縫うサシ針などの大小・長短の針と大小の庖丁などの道具をいれ、定規、物指、分解できる作業台を自転車などにつけて弁当持参で毎日かよう。また少しへこんだ床に藁を加えてつくりかえることもよくある仕事だったという。

現在では自動車で畳を運び、作業場で機械で仕事をしているので当時のようすはみられない。



【写真95】畳職の仕事（提供　石井三五郎）

いかけ屋

鉄鍋などは貴重品であった。若し穴などあけてしまうと、いかけ屋がまわってくるまで待った。こわれたものは修理・修繕して使うのが当然のことであった。

いかけ屋は、リヤカーなどにフイゴ（吹子）と炭と金敷（金床）などを積んでやってくる。軒前などをかりて店びらきすると待っていた人々がそれぞれ鍋・釜などの修理を頼みにくる。町に店をもついかけ屋もあったが、農家ではこれを待つことが多かった。

同じように、鋸の目立て屋、刃物の研ぎ師（刃物だけは研ぎ屋ではなく研ぎ師）もまわってくることが多かった。また桶屋が

まわってタガのゆるんだ桶や樽を修理したり、下駄屋が高下駄の歯のいれかえをすることもあったという。

下駄屋

矢吹町には会津屋（中町）、須藤下駄店（中町）、芳賀下駄店（中町）など製造・販売の下駄店があった。下駄といったら桐材の朴歯（ほおば）の高下駄とか余所行きの駒下駄（こまげた）などだれもがはく必需品であった。また、盆とか正月には、ポッコリ下駄や桐下駄を買ってもらって子どもたちは大変喜んで、年一、二回の子や孫への贈り物にもなっていた。

下駄屋の庭先や裏手に桐の下駄材を玉切りにして丸く高く積んで乾燥している風景もよくみられた。

下駄をつくるには、桐、ポプラ、杉などの軽い木質の木材を玉切り（おおよそ下駄の大きさに切る）にしてよく乾燥し、墨掛け、小引き、削り、乾燥、仕上げと多くの日数とたいへんな作業行程を要した。特に仕上げは入念におこない、材質の特徴を生かした仕上げをする。それに鼻緒をつけ店頭に並べるわけである。さらに買手がつくとその足にあわせて鼻緒の調節をする。鼻緒は別に仕入れ、客の好みでその場で鼻緒をつける事も多かった。一時物資不足の時期には鼻緒もつくったという。

矢吹で最後まで（平成四年ころ）製造を続けた芳賀下駄店（芳賀重治）は、古殿町で修業した職人で白河市などの店にも販路を広げたが、一足ずつの手づくりで製造を続けた。

通常下駄店は新しい下駄の販売と、鼻緒のつけかえ、高下駄、中歯下駄の歯のいれかえもしている。

やがて下駄は和服専用の履物となり、和服の着用の減少とともに需要がなくなってくる。下駄屋として専門に下駄を売っている店はなくなり、下駄屋は靴屋にかわり、下駄は一部地方の特産品になったり、大手工場の製品として現在は売られる程度になった。かつての製造販売の下駄屋は姿を消した。

【写真96】いかけ屋